■ 2022.4.25　No244

脱原発情報

発行　双葉地方原発反対同盟　　責任者　石丸小四郎
970 － 8026　いわき市平童子町３－６　Ⅱ 903
TEL・FAX　0246-25-7737　携帯　090-4477-1641
E -mil：ishimaru19430106@gmail. com　ブログ「石丸日記」

日本の地下で何が起きているのか！ 女川原発2号機再稼働･･･2024年2月と発表

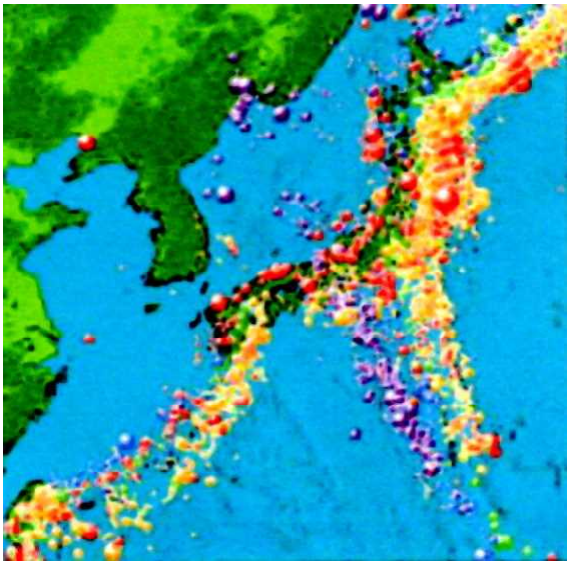
19 日、8 時 46 分ごろ茨城県城里町で震度 5 弱の地震があった。東北から中部にかけて震度４～１を観測した。気象庁によると震源地は福島県中通りで震源の深さは 93 ｷﾛでＭ 7.4 と推定されるという。

３月 M4.0 以上が 195 回発生している！

それにしても３月はＭ４.0 以上が 195 回（ＦＮＮプライムオンライン 2022 年 4 月 12 日 19 時 22 分コメント）で通常の２倍だという。

（資料１）は 1960 年～ 2011 年にかけて日本付近で発生した地震の分布図である。

（資料２）は多くの地震がプレートの境界に沿って発生していることが良く分かる。３月 16 日、福島県と宮城県で最大震度６強を観測した影響で両県で 73 回発生しているというのだ。



（資料１）1960年～2011年までの地震分布図

Ｍ 4.0 上の地震は、１月末から地震活動が活発化し、沖縄本島北西部でも３月に 20 回発生している。

石川県能登地方でも３月に震度１以上の地震が 22 回観測され 2020 年 12 月に地震活動が活発化して以降、１ヶ月で過去最高になった。

特に、宮城、福島沿岸では“グラリ”揺れるたびに冷や汗である。

近年 プレート境界型地震が続発！

（資料２）は、分かりにくいかも知れないが、枠組み４枚のプレートがせめぎ合う「プレート境界型地震」は過去の例を紐解くと、Ｍ８クラスの巨大地震になることが多いという。

- **2011 年、東日本大震災（Ｍ　9.0）**
- **2003 年、十勝沖地震（Ｍ　8.0）**
- **1994 年、東北はるか沖地震（Ｍ 7.7）**
- **1946 年、南海地震（Ｍ 8.4）**
- **1944 年、東南海地震（Ｍ 7.9）**
- **1923 年、関東大震災（Ｍ 7.9）**

（資料２）　４枚のプレートがせめぎ合い巨大地震が発生

その年数間隔は近年非常に狭い。ところが、東北電力は３月 30 日に、女川原発２号機再稼働を 2024 年にすると発表した。何ということであろうか！岩手県が最大津波 29.5 ﾒｰﾄﾙだったと発表したのが前日の 29 日であった。

東日本大震災から 11 年、忘却では酷すぎる。

汚染水放出のシミュレーションは…
東電はウソと風評を福島だけに押しつける思惑！

東電は、これまでの「ALPS 処理水希釈放出設備の全体概要」（2021.12.21）の放出シミュレーションを何度か示しているが、分からないことだらけである！今回は海洋放出の問題点を探ってみた。

本当に原発周辺２～３㎞に留まるのか？

（資料３）の１㎞先の放水口から海洋放出するというのだ。

更に（資料４）の東電の「海洋放出の拡散シミュレーション」では、こうなっている。

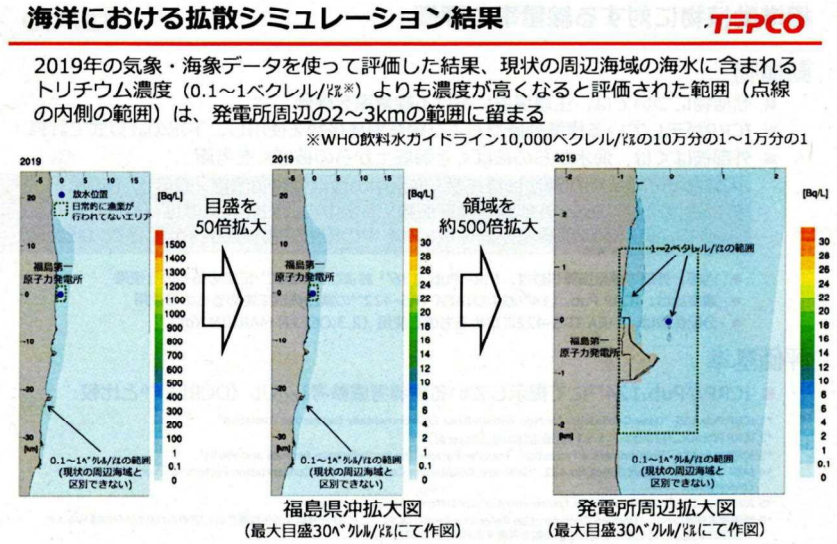
①トリチウム濃度が高くなると評価される範囲は原発周辺の２～３㎞の範囲に留まる。

②季節の平均をとっても発電所周辺に留まる。

③最も北に広がる場合でも南・北・東 30 ㎞に留まる。

…とわざわざゴジックで 25 項目にわたって「留まる」を強調している。

（資料３）　設備の全体像



（資料４）　海洋における拡散のシミュレーション25通りも掲載

しかし（資料５）は「日本近海の海流」である。

「福島県沖には強力な南向きの親潮（千島海流）が流れており、千葉県沖で黒潮とぶつかって太平洋沖に流れる」となっている。

（資料５）福島県沖では強力な南向きの海流が‥

更に、日本近海には４つの海流が流れている。フィリピンあたりから流れてくる、暖かい海流、黒潮と日本海へ向かう対馬海流になる。千島列島から流れてくる冷たい親潮もある。東電は、あいもかわらず重要な海流を無視し続けている事が分かった！

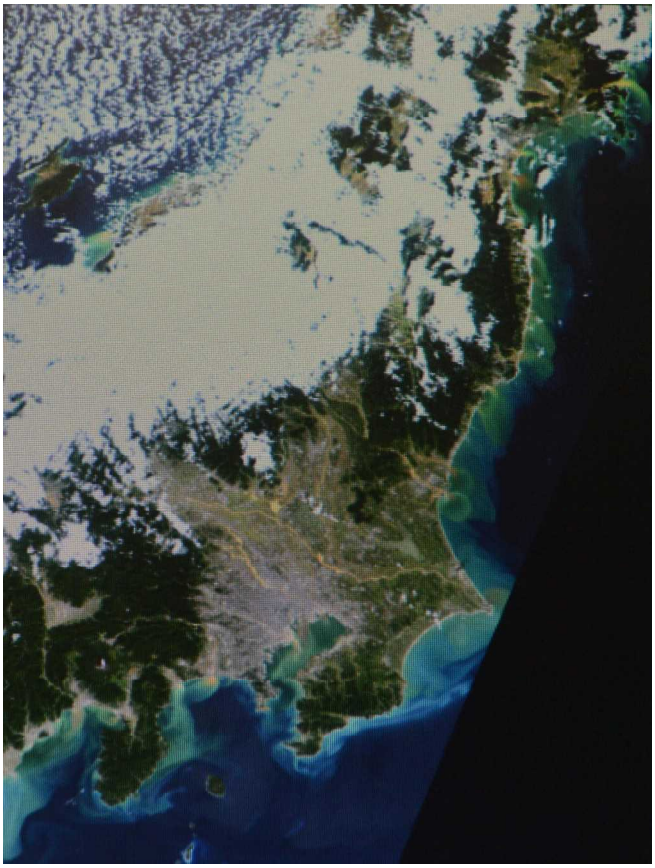
福島県沖は強力な親潮（千島海流）がある！

（資料６）は「2019 年 12 月 12 日の台風 19 号が通過したあとの宮城県北部から福島県・千葉県沖の衛星写真である。

これを示したのが研究を行っている識者（注１）で「汚染水海洋放出の争点・トリチウムの危険性」の論文である。それによると「福島県沖から茨城県沖までは海に流れ出した土砂や汚泥により海水が変色し、大きな渦を巻くように南方向に流れていることが見て取れる。これとは対照的に、千葉県の房総半島沖では、強力な北東方向の海流が存在していることが示されている。一番上の濃い大きな泥土の流入が宮城県の阿武隈川、中央少し上に小さい小名浜港が見えてくるが、そのすぐ南が鮫川で、ここまでが福島県。中央部下の２本の大きな流入が茨城県久慈川と那珂川、下方が利根川であると思われる。福島県沿岸に流

れ出た河川水が大きく南方方面に流れていることが、はっきりと示されている。このように、事故原発の沖合においては強力な南向きの海流が存在していることが確認できる。

この衛星画像だけからいっても、『トリチウムのバックグランドレベル１ Bq ／ L を超える（汚染）エリアは発電所近傍に限られる』という東電のシミュレーションが現実を全く反映していない可能性が高いことをうかがわせる」と主張している。

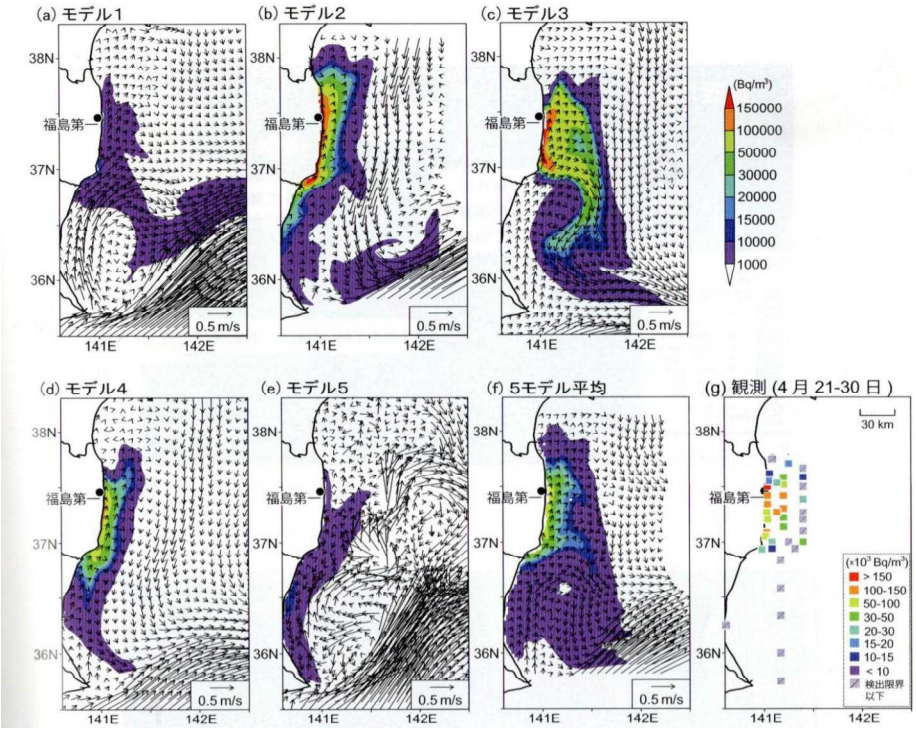


（資料６）　2019年台風直後、福島から千葉沖・東京湾まで流れている事が良く分かる…

更に「汚染水放出の影響は、もっぱら事故原発沖とその近傍の福島県沖に限られという結論が出てくる。（略）汚染水の海洋放出の影響は集中的に、福島県民と福島の漁業者に、さらには関連する福島の旅館業や観光業者に帰されることになる。つまり、東電のシミュレーションの通りの事態が起こると仮定すれば、東電は、事故放出放射能によってだけでなく、事故処理のための汚染水の放出によっても、現在受けている被害や今後の被害の大きな部分をもっぱら福島県民とくに漁業者や観光業者に集中的に加えようとしていることになる。その意味で、このシミュレーションは、東電が福島県民や周辺住民に対してであれば、幾重にも被害を与えても何とも思わないかのような、福島県民と周辺住民に対する頭から愚弄した態度を表明していることである。

この態度は悪意の可能性は否定できない。その場合、東電自身が、福島に対する「ウソ」や「風評」を流して「風評被害」を自分で拡散しているといわれても仕方がない」と手厳しく指摘している。

（資料７）は、もう一つの文献があった。同じく升本順夫氏[注２]で「海洋直接漏洩した ^{137}Cs の分散シミュレーション」で「原発事故環境汚染・福島第一原発事故の地球科学的側面」[注３]に収められている。



（資料７）　2011年４月下旬の海面付近の流れとセシウム137分布図である

「2011 年４月下旬になると ^{137}Ｃｓの分布はさらに南、あるいは南東方向へ広がると共に、福島県沖でも弱い北東方面の流れに伴って徐々に東へと張り出していることが分かる。（略）この海域の複雑さ、再現の難しさを現して

いる」とある。

確かに、「→印」の海流は複雑で「モデル１～５」まで多岐に渡っている。特に、「５モデルの平均」を見るまでもなく潮流は福島県から北にも流れ（請戸漁民のＩさんの話）南は茨城県、千葉県に激しく流れていることが見て取れる。

東電の言う「原発周辺の２～３㎞の範囲や周辺に留まる」や「南・北・東 30 ㎞に留まる」は現実を全く無視した暴論と言わざるを得ない。

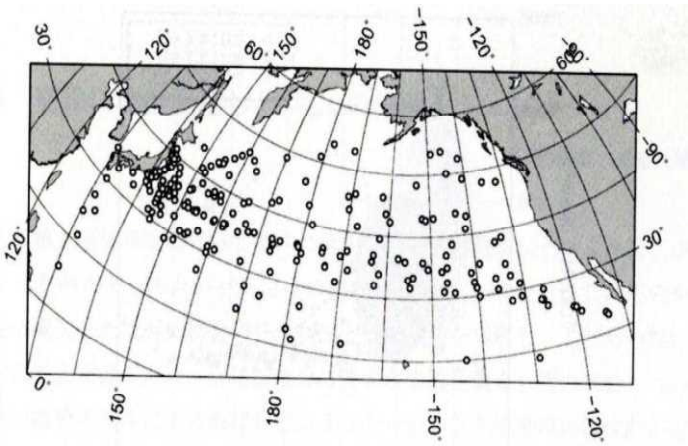
（資料８～９）は「外洋での輸送」で青山道夫氏[注4]は、次のように記している。

「2011 年４月から 2012 年３月にかけて福島第一原発の放射性セシウム(134Cs と 137Cs) の広がりを知るため自動車輸送船篤志船等に依頼して採取した。(略)…西部北太平洋高緯度域で濃度が高い…」としている。

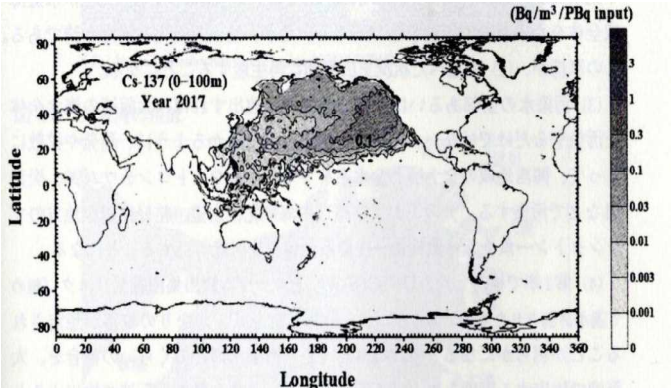
最後に、様々な汚染水放出のシミュレーションを示してくれた研究識者の皆さんの他に、現地の海で永年にわたり漁業をしてきたＩさんが病気の身でありましたが、お話を伺ったことである。

驚いたのは**（資料10）**の漁師専用の「海図」だった。そこには細かい数字でびっしりと「海流の流れ」「海抜」「河川の位置」「漁業禁止区域」「小型機船底びき網行禁止線」や「餌料びき禁止線」など、こと細かに書かれたのには驚いた。

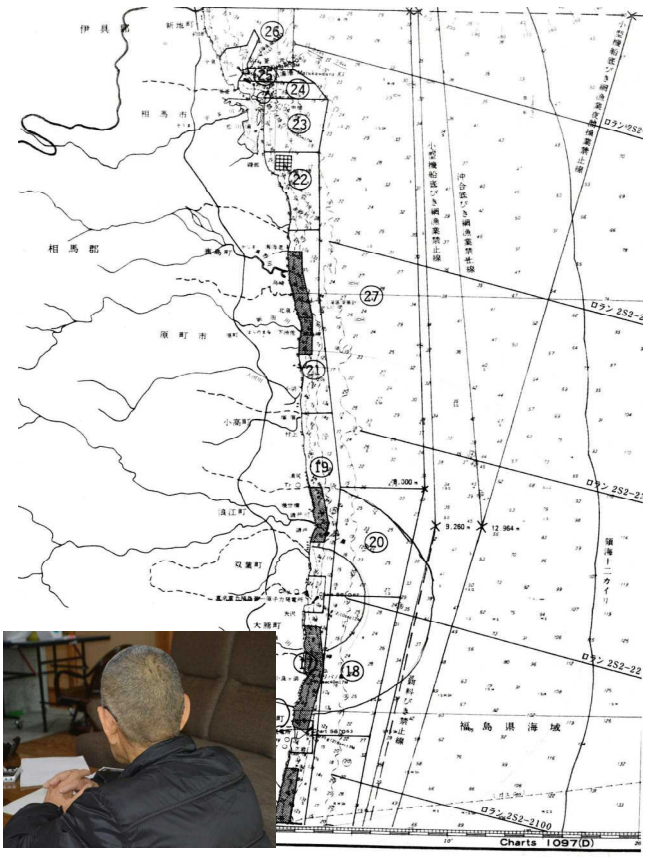
そして、「東電のシミュレーションあり得ない…」そして「識者のシミュレーションが正しい…」と伺った。特に「冬は北から南へ…夏になれば逆に南から北へ…」と変化し「泊（とまり）・青森からも流れてくる」とのことだった。今回の執筆にあたり改めて思ったことがある。それは、識者が言う「東電は福島県民と周辺住民に対し頭から愚弄した態度を表明している。この態度は悪意の可能性は否定できない。その場合、彼ら自身が、福島に対する『ウソ』や『風評』を流して『風評被害』を東電自らが拡散しているといわれても仕方がない」と手厳しく指摘している。東電は福島県に誘致前から、秘密裏に…そして津波の被害が昔から有ったことを改ざんし、後もその連続であった。運転開始後も電力業界では「東電には福島県という植民地がある！」と話しているという。(この部分は連載の「双葉地方原発反対同盟の歴史」にゆずる)



（資料８）　福島第一原発事故以降の太平洋での資料採取地点



（資料９）　福島原発事故放出放射能の太平洋拡大のシミュレーション



（資料10）　漁民仕様の「海図」と病をおして説明してくれた元請戸漁民のＩさん

社民党福島県連合
地震について東電に詳細情報提示を求める！

社会民主党福島県連は３月 17 日、東電に対して前日の深夜 11 時 36 分に発生した福島県沖地震に伴う冷却装置の停止などについて、速やかな原因究明と事故防止対策強化について要請した。その結果４月５日に回答が届いた。

翌日に要請書を提出‥即座の対応を求める！

東京電力ホールデングス（株）
　代表取締役社長　小早川智明様

2022 年 3 月 17 日
社会民主党福島県連
代表　狩野光昭

福島県沖地震に伴う東京電力福島第一原発及び同第二原発の使用済み燃料プールの冷却停止などについての原因究明と事故防止対策強化の要請について

（前文割愛）

記

１．３月 16 日福島県沖地震に伴う、汚染水に関わる設備等を含む、各種施設・設備の総点検を行い、その結果を公表すること。
２．今回の地震における使用済み燃料プール、火災報知器、陸側遮水壁、タンク、汚染水など一切のトラブルの原因を明らかにすること。
３．今後においても、強い地震の発生が予想されることから、福島第一原発及び同第二原発の施設・設備の事故防止の安全対策について明らかにすること。　以上

東電は復興本社による７頁の「回答書」と 61 頁の「３月 16 日福島県沖第一原発の対応状況について」及び「日報」等で回答してきた。

〈回 答〉

１．について

・第一・第二、共に震度６弱であった。

・両原発とも設備に影響はあったものの漏洩、人身災害、今後のプラント運営に大きな影響を与える事象はなかった。

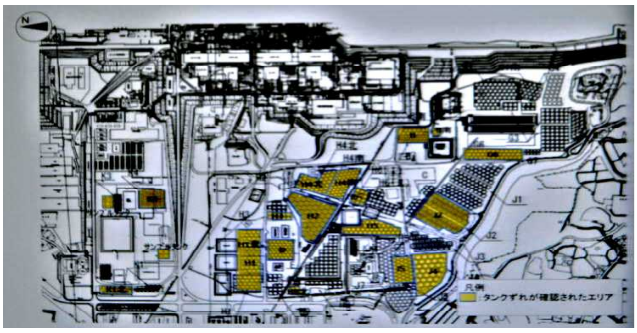
・３月 17 日、午前７時３分に通常の監視態勢に移行した。

・第一原発点検状況について以下の通りである。

①「使用済み燃料プール」は２・６号機、共に 17 日、朝方まで冷却を開始した。

②２・５機の同プールと共用プールは溢水（いっすい）した水たまりを確認したが拭き取りを行った。

③ ALPS 処理水を保管しているタンク 1,136 基の内 160 基でズレを確認したが耐震性確保の観点から基礎を固定していない。そのため一定以上の力が加われば、動くことにより力を逃し損傷を防ぐ設計になっている。そのためタンクから漏えいはなかった。



（資料11）　　黄色がタンクのズレがあった部分

④廃棄物を収納保管しているコンテナ８基が転倒して保護衣や鉄くずの収納物が外に出たがモニタリングやダストモニタ等に変動はなかった。

（資料12）　　コンテナ８基転倒の現状

２．について

①２号機の燃料プールにおいて水位低下が確認されたが冷却ポンプを運転員が停止した。５号機は水位低下により自動停止した。原発は異常なしと判断したので 17 日朝方まで冷却を開始した。

②火災報知器が作動した問題について、17 日、０時５分、当社社員が確認したが異常はなかった。富岡消防署が建屋３カ所作動状況を確認したが誤報と判断した。地震による塵や埃の影響と確認した。尚、火や煙の影響で発報したのではないことを確認。

③１号機原子炉格納容器内の水位低下だが温度や圧力等を監視強化中である。22 日までに水位約 40 センチメートル低下していることも確認。3.11 時に破損したベローズ、ドレンからと思われる。

④陸側遮水壁ポンプの健全性は確認している。

尚、紙面の都合上、割愛して報告した。

加害者が賠償額を決め、誰も重大事故の責任をとらない

「しょうがあんめぇ」と諦めるな！歴史の書き換えは許さない！

斉藤章一

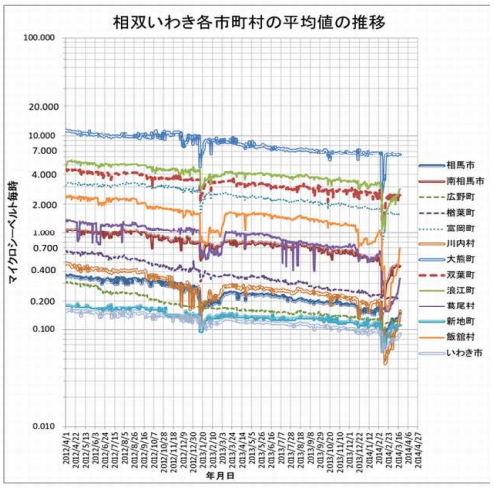
避難指示地域に指定された葛尾村で「葛尾村原発賠償集団申し立て推進会」を結成し（以後推進会と記載）東電交渉を闘った小島力さんが今年の 2 月に 87 歳で旅だった。彼を突き動かしたものは「加害者東電・国が賠償金を一方的に決め被害者に押しつける姿勢に対する人間としての尊厳」であった。

小島さんは福島第一原発の建設時から反原発運動を続けてこられた。その傍ら音楽や詩作に深い造詣があり反原発の歌や戯曲などを数多く作詞・作曲し、2013 年には詩集「わが涙滂々」を、2021 年に原発事故から損賠の闘いを綴った「故郷はかえるところにあらざりき」－西田書店－を発刊した。

小島さんと葛尾村の有志は推進会を結成し ADR [注4] を通して東電交渉を進めた。この組織化に当たっては既成権力の表・裏にわたる妨害にも硬軟織り交ぜたしなやかな姿勢で切り抜けたようだ。この経緯については上記著書に詳しいので是非購読してほしい。詩人の細やかな描写に引き込まれてしまう文章である。

推進会は損賠交渉の他葛尾村の 40 カ所あまりの地表と地上 1 mの空間線量の実測調査を 2013 年から開始した。その中で明らかになった事は「居住地や道路、施設などの周囲 20 mの除染では年間 1 m Sv の基準に程遠いこと。除染箇所と非除染箇所の線量が逆転している箇所があること。除染による汚染濃度の減少がわずか 30 %であること」など。村の 90 %を占める山林原野を放置したままでは、１軒１億円と言われる経費をかけても「賽の河原の石積み」に他ならないと会報は訴えている。

（資料 13）を見てほしい。2012 年～ 2014 年 4 月までの相双・いわきの市町村のグラフである。図が小さくて恐縮ですが、これで分かることは全体的になだらかに減少傾向にあること。大雨や降雪によって線量が下がったあとに以前より持ち上がっている市町村があることである。このデータは市町村毎なので平均値が使われていると思われるが、葛尾村のような山村では場所によっては推進会が指摘するように以前より線量が上がる所が出てくる。推進会の 2014 年５月から約半年ごとの 2018 年７月までのデータを見ると前回測定値より上がっているところが半数あまりある。結局の所、部分除染では地域全体の線量の自然減衰の曲線に沿ってしか線量の軽減は難しいということだろうか。



（資料13）葛尾村は中央付近のむらさきの線

（資料14）楽譜を前に楽しそうな生前の小島さん

これは小島さんの著書のあとがきの言葉だが「未曾有の原発事故に関して、周囲に同調して口を閉ざしてはならない。歴史を書き換えようとする勢力をおもんばかって、『声なき声』を圧殺させてしまってはならないのだ。それがこの書を著した、唯一の理由である」

小島さんの一生を貫いた信念に通じるものであろう。

合掌

出典　文献

・（資料１）気象庁地震・（資料２）火山防火対策・読売新聞
・（資料３～4）東京電力ＨＤ・（資料５）http//inagic.qee.jp/kairyu.tml
・（資料６）読売新聞 2019.10.15・（資料７～８）「汚染水海洋発事故緩急汚染・福島第一原発事故の地球科学的側面」恩田裕一氏ほか３名・東京大学出版会・（資料９）升本順夫氏「海洋直接漏洩した ^{137}Cs の分散シミュレーション」・（資料 10）編集部・（資料 11 ～ 12）東京電力ＨＤ・（資料 13）MAMOTECH・（資料 14）編集部
・（注１）「汚染水海洋放出の争点・トリチウムの危険性」渡部悦司氏他２名・（注２）「汚染水海洋発事故緩急汚染・福島第一原発事故の地球科学的側面」恩田裕一氏ほか３名・東京大学出版会
・（注３）青山和夫著「東京電力福島第一原子力発電所事故に由来する汚染水問題を考える」科学・岩波書店 2014・８月号
・（注 4）原子力損害賠償解決ｾﾝﾀｰ